

『無者キリスト』を読む⑦(最終回) 第三部 無の実存
『無者キリスト』第三部第五章「宗教と文化」

2001年11月18日(東京 新宿)

●新しい信仰復興

おはようございます。今日は、『無者キリスト』の最終回です。復刊の『無者キリスト』(2001/10/31、河出書房新社発行)が出来上がって、私の方へ届けていただいて、一番にお送りしたのは韓国のKさんという、昔の西ドイツ留学時代の私の同じ先生の所で勉強していた韓国の方なんです。その方にお送りしましたら、一昨日、礼状が参りました。

『無者キリスト』を誠にありがたく拝受いたしました。……非常によい本を贈っていたくださりまして、非常に感謝します。将来、信仰についてまたご指導を頼むかもしれません。……『無者キリスト』の本は私に最も適当な本であり、家内は教会堂で教理を教えておりますので、一緒に読んでおります。私に通っております聖堂の責任神父に見せますと、自分は日本語が読めないので翻訳してほしいというふうに私に頼みましたが、大事な所だけでも翻訳したいと思っています。それは可能だと思います。……機会がありましたら、お目にかかりたく存じます」

と、そんなことを書いておられる。この方は私よりも二つ年上なんです。現在は71歳。向こうで名誉教授で法律学会の方でも重鎮のようで、学士院会員と書いておられる。そういうご縁なんですけれども。また日本にこられる時にはお会いしたいと思っています。

そんなことで、この『無者キリスト』の本が、日本国内はいかがが知りませんが、少なくともそういう、外国で心ある人の目にとまって、それが新しい信仰復興、即ちリバイバル、宗教改革につながっていけば、素晴らしいなと私は思っています。……こういう本が日本でも広く読まれるようになれば素晴らしいと思っています。

前置きはそのくらいにいたしまして、今日やります所は355頁の第五章「宗教と文化」を取り上げたいと思います。この「宗教と文化」という講演は、小池先生が東京大学をご退官になります直前、いわゆる停年講義、最終講義というところで、東京大学で講義されたものを元にして書かれています。そういう停年講義に直接関わる部分はカットして、お話の中身部分はそのままです。それが第五章の「宗教と文化」です。「ふくわうち」のお話とか、いろいろそういう面白いお話があるんですが、それはカットしてあります。1964年のちようど先生のお誕生日2月7日の直前にお話になったはずです。

《本稿「宗教と文化」の原型は、一九六四年二月四日(火)午前十時から行われた東大



教養学部における著者の最終講義

と、378頁の一番末尾に註が書かれています。だから、非常に円熟した情況の先生が話された。しかも最終講義といえますと、先生はドイツ文学、ドイツ語の教室の先生ですから、そういうドイツ語関係の教授たちはみな来ます。それから、先生の講義を受ける学生や関心のある一般の学生が聴けるようになっていきます。

ですから、そういう意味で大学を後にするにあたって、

「これだけは諸君に伝えておきたい」

という、日頃はダイレクトな形で直接的な形では話しておられない、そういう内容を集約的に自分の話したいエッセンスをまとめて話された内容であります。それを聴いたあとで、同僚たちも驚いたそうですね。

「小池さんはこんな深いものを持っているのか」

と言って驚かれたそうです。でも驚くだけではダメで、やっぱり驚いたことをきつかけにしてその中に入らないと。そういうところがダメなんです、日本の方々というのは。人はいいのだけれども、人がよくて驚くだけで、また段々忘れてしまう。困ったことです。

●第五章 宗教と文化

始めの所は導入部です。「宗教(円)は東洋、文化(三角)は西洋」という。まるで、西洋には宗教がなくて、東洋には文化がなくて宗教があるみたいな書き方の見出しですけども、これはものの考え方ですね。東洋の方は直観的にものを考える。あまり分析しないで、むしろ体で感じ取ったこと、もつといえれば悟ったこと、無私の境地で悟ったものを中心にいろいろ真理を展開していくというのが東洋だということ。

それに対して西洋はまず疑ってかかる。一つの「テーゼ」があつて、それに対する「アンチテーゼ」があつて、それを「アウフヘーベン」するような、止揚するような第三のものが出てくるという、「テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼ」、「正・反・合」といわれますが、どこまでもぶつかりながら更に深めていくというもので、三角形で表す。要するに、理性的、分析的で、分析した上で総合していくという理性の作用を重んじていく。それに対して、東洋の方は直観的であつて、そういう違った違いがある。

だから、形で表すならば、西洋は三角形である。それに対して、東洋の方は円、あるいは球だということ。結論的に言いますと、先生はこの円、あるいは球、これが最後のものだということを仰います。

「大体、天体を見てごらん。四角い天体があるかね。太陽も地球もみなまん丸いではないか」

と言う。そうなんです。角があるものは、その角が全部取れてしまって、まん丸くなります。そして、円とか球というのは、一切を吸収して包摂して溶かしてしまう。あとで出



てきますが、どんな三角形も全部、円には吸収される。いかなる三角形もその三つの頂点から等距離の点が必ずある。その点を中心にして等距離の半径で円を描けば、どんな三角形もみな円に包摂される、内接することになる。ですから、円というのは素晴らしい。どんなものも全部、呑み込んでしまうと。そういうことを後の方で言っています。

東洋の方は、どちらかというと、非合理的であって直観的である。あるいは、超合理的である。それに対して、西洋の方はどこまでも論理で考えていく。

あの『弓と禅』という本を御存知でしょうか、あの本に出てくるオイゲン・ヘリゲル[Eugen Herrigel (1884～1955)]ドイツの哲学者。海外では日本文化の紹介者として知られている。特に弓道を通して禅をひろく海外へ紹介した」というのは、ドイツの宗教、倫理学、哲学を先攻している哲学者です。それが日本へ来て、東北帝国大学(昔の二高)、旧制高等学校の先生になるけれども、目的は禅を学びたいと。でも直接に禅を学んでも、これは大変だということで、禅をベースにした阿波研造(1880～1939)という弓道の師範がいて、この方について弓道を学ぶことによって禅を身につけようと思って、やるんです。その血のにじむような努力のあとを綴ったものが『弓と禅』という本に出ている。どこまでも理屈で、理詰めでいこうという人が、そういうった弓道の修行において、どれだけいろいろぶつかって苦労するか。それがいつしか、そういう理屈がなくなって体で覚えてしまう。

「こんなに簡単なんですか。私はもう何も意識はなくなりました。いったい、弓を射ているのが自分なのか、弓が自ずと射ているのか、もう自分というものを意識していません」

という状態に入るようになる。初めて遠くの的^{まじ}に当たった。その時に師範は、

「それですよ」

と言う。

「あなたは得意な顔しているけれども、あなたではないんだ」

「では、何が当てたんですか？」

「それが射たんです。その前に頭を垂れましょう」

と先生は言う。「それ」とは何かわからない。つまり、自分でもない、弓でもない、第二のものだと。小池先生なら、「聖霊」ということになるかも知れませんが、

「それが射たんだ」

と。要するに、

「自我意識を捨てろ」

ということを盛んに言われる。「何センチと距離を測って、呼吸はどうする」とかいう言葉で説明できるようなものではない。体得するものだ。「離れ」というのがものすごく大事なことで、引き絞っているものが突然放たれて飛んでいく、その瞬間ですね。これは己から離れているという脱我、それと一つでないダメだという。己というものから離れている



いと、本当の弓はできない。そういうことがずうつと書いてある。

「エン・クリスト」の第3号に、阿波研造あわけんぞうの話が出てきます〔註：「エン・クリスト」第3号1981年2月冬季号「信入行転・愛抱捨身・望生放光」(1980年秋期京都福音特別集会記事 奥田昌道記)〕。京都で特別集会の時にお話になったところに出てきます。それがきっかけで私は現物を読んでみた。……小池先生のお話をきっかけにして読んでみたら驚いた。そして、さっそくその次の年の民法の授業の一番最初に、一時間半かけてこの阿波研造の話をした。そして、学生は最後まで覚えていてるんですね、

「先生の物権法の話は忘れたけれども、あの『弓と禅』の話は忘れられません」と言っていましたよ(笑)。そんなことがありました。

要するに、ヨーロッパ的な単なる理詰めだけでつきつめていくものが、壁にぶつかるとき、それを超越した世界で本当のものが体得されるということをよく表している。

それでここに大事なことが356頁の所に出てきます。

《第五章 宗教と文化》

宗教(円)は東洋、文化(三角)は西洋

……Religion (≡lat. Religio) ≡ Wieder-Verbindung (再結) を意味する。普通解釈され

てくる。

「Wieder-Verbindung」の「Wieder」は「再び」ということで——ドイツ語では「アウフヴイーダーゼーエン」(auf Wiedersehen: ようなうら)という、「アウフ」は「何々を期して」、「ヴイーダー」は「再び」、「ゼーエン」は「見る」——「Verbindung」は「結び合わせる」という、「再び結び合わせる」ということです。

ということとは、元は結ばれていたのが一端、切れた。それをもう一度結び合わせるといふ意味です。元は何と結ばれていたかという、いうまでもなく、神さまと我々が結ばれていた。アダムとイブの神話にも表われていますように、元々、神さまに造られた人間存在は、神さまを生命みなもとの源として、深い結びつきの中にあつた。ちょうど赤ちゃんがお母さんとへその緒おでつながっているようなものですね。それがちゃんとパイプで結ばれていた。それが切れてしまった。そこから人間の迷走が始まった。人間はどこへ行つていいのかわからなくなつた。いくら理性を働かせても本当のものに到達できないということ、そこに人間の失われた姿がありました。

その失われた姿をもう一度元の姿に回復する。いやもつと素晴らしいものに回復するといふ、この「再結」、再び結び合わせる、これが「宗教」と訳されている。この「宗教」という訳は全然よくない。「宗」というのは何かわからないでしょ。「教」というのは「教え」でしょ。「宗の教え」といったら、「何々宗ですか?」ということになつてくる。「何々宗」ではなくて、「本ものとの結び、再結」、これを何という言葉で表したらいいでしょうかね? やつぱり日本語というならば、「道」ではないですかね。「本ものの道」というか、人間の本



来あるべき姿に回復する。そういう何ものか。まあ「宗教」に代わる言葉がないから、ここでも「宗教と文化」ということで、「宗教」という言葉を使っておられますけれども。人間が超人的なもの、ある絶対的な霊的實在といかに関わり、いかに結びつくかを問題とするわけで、その関わりを中心がたましいであるわけである。人間存在が有 limits であり、相対的性格のものであり、欠陥あり、迷いあり、不安定である限り、必然本来具有する一番根本的な問題は宗教問題である。宗教問題こそ万人が必然問われている自らの問題で、このような根源的な問題が真剣に問われなくて、文化文明を云々してみたところで、それは実は根を無視して樹木を育てようとするに等しいわけである。二〇世紀もそろそろ日暮に向ってゐる今日……

そしてもう20世紀も終りにさしかかっている。この時はまだ1962年ですね。もうあれから既に40年近く経とうとしています。いよいよ言えるわけです。本当に最も大事なものが見失われている。そこへ立ち還らなければ、人類の問題というのは本当の解決にはこない。

そこに各人が立ち還るのだから、……人類万般の問題は、まことの解決や展開を得ること無く、人類はおそろべき壊滅を自ら招くことにならないと誰が保証し得よう。》

● 宗教の三様相

そして、宗教の三つの姿が次の358頁に図が出ています。三角形が二つ接しているような「第一図」、それから円が二つ書いてある「第二図」、そして「第三図」は円が二つで真中に十字架が立っている。

《宗教の三様相》

さて高次な宗教には大体三様の相があると思われる。その一は哲学的思惟の性格が強く、理神論的なもので、神を宇宙の第一原理として考え、ピラミッドの頂点の如く絶頂において、一切を合理的に解釈せんとするものである。そこにはたらく法則は必然法則であって、自由の法則ではない。それゆえに神といっても、実は実存的な関わりではなく、理論的に理性とのみ関わりをもつ超越者の如くである。ギリシアの特にアリストテレスの哲学を源流とする思惟体系に見られるものである。いわば第一図の如きものである。

理屈の上で神さまを考えた。だから、超越的な神になって、それと世界が接しているという、そういう理詰りな神であって、それが人間の中にどのように入ってこられるのかとか、どういう形で人間はその神さまに接するのか、そんなことは一応抜きにした。一応、観念で措定して、それと相対する人間があるという、その程度のもんです。第二番目は、これは関わりを持ちます。この持ち方が直接的なんです、第二図は。

その二は、直観的、内観的、瞑想的であって、神と宇宙、世界、自然といったもの



が相即する汎神論的なものである。これは主として仏教やヨーロッパの神秘思想にみられる形相である。

ここに、仏教というのが出てきます。私はやはり仏教の中でも特に禅宗がそうではないかと思う。親鸞の方はむしろキリストの方に、第三図に近いと思います。むしろ禅宗の方が中世のヨーロッパの神秘思想と同じように瞑想——禅なら座禅ですね——座禅して無我の境地に入った時に、そこで何か宇宙的な根源的なものと合一する。そこではもう己というものが脱落している。何か宇宙の気と一つになる。そういう境地を求めている宗教、あるいはそれで達し得た霊的次元、そういうものを尊ぶ宗教だと思う。だから、これは謂わば「神即自然」、人と神との合一という姿。十字架とか何かそういう何かの媒介を経て、そこへ達するのではなくて、直接的なんです。

だから、自分がそういう境地に入らないといけないわけです。人間が瞬間的にはそういう境地に入れるのかも知れません。さっきの「弓と禅」のお話のように。瞬間的には無我の姿で、自分が矢を放っているのか、矢がひとりでに飛んでいったのか、何も自覚しないで、最高のものが現われるというのは、それはあるのかも知れませんが、そんなのはしょっちゅうやつてられないわけです。例えて野球でいいますならば、最高160キロで投げるピッチャーがアメリカにいるらしい。日本だったら、154キロで17歳の少年が投げたとか。あんなのはしょっちゅう投げられるわけではない。瞬間最大風速みたいなものなんです。台風だってそうでしょ、瞬間最大風速60メートルなんていいまでも、それは瞬間最大風速であつて、常時そうだったたらたらまんわけです。

だから、禅の悟りで、もしもそういう無我の境地に入ってしまったならば、それが常時それでやれるかというんですよ、電車の中に乗っていてもどこにいても。私はそういうことは自分でやったことがないからわからないけれども、それはいかなる禅の達人であつても、それはちよつと難しいのではないか。やはりお寺の中に籠もつて、静寂の中に自分を置いて座禅を組んで、そして何時間も瞑想にふけていて到達できる境地であつて、それがいざ娑婆しやばの中へ出てきて、絶えずそうでいられるかという、私はそういうものはちよつと信じられないですね。

人間というのは迷いやすいから、このお坊さんは本当にそういう境地に達した坊さんか知らないけれども、

「わしは仏僧であるが故に何が来ても驚かない。癌であるか何であるか、ハッキリ

言っていたらいいよ」

と言つて、医者から

「あなたは癌です。もう治りません」

と言われたら、途端にガックリきて、もう立ち直れなかったという非常に人間的なお話があります。この癌告知の問題ではいつもそのことが出てくる。癌は本人に知らせるべきか、



知らせるべきでないかと。治る癌なら知らせたらいい。でも、治らない絶望的な状況の時に、なお本人に知らせるべきか、それとも黙っていた方がいいのか。

「知らせてもらうことによつて、残りの僅かな半年を本当に充実して生きる、そのために知らせてもらう方がいいんだ」という人と、

「いや、もう生きる気力を失つて、後の半年が完全にダメになつてしまうから、知らせない方が幸せなんだ」

という人と、二つに割れておりましてね。結局、結論は「人を見て」ということです(笑)。相手がどんなお方であるか、それによつて対処しようという平凡なところに来てしまう。そのくらい難しいわけです。

死を恐れるというのは結局、囚われですよ。

「死にたくない、生きていたい」

と、それを奪われるわけですから。それでも必ず「あと何日」なんていうふうに決められているんですから、これは平然としているという人は全く自分に囚われていない人です。でも、そんな人は本当に少ないわけなんです。さっきの悟りを開いたお坊さん、無我の境地に達した方が常にそうであるかというのと、それは誰にもわからない。

ですから、この第二図の、神さまと融合する、合一するという、その神秘的な世界というものは、人間がある状況において深く瞑想して、修道院の中で、深山幽谷の中でそういう状況の中で信心して、瞬間的に、あるいはある程度の時間、そういう状況に自分がいたとしても、これがもう一度日常生活に戻った時に、

「いつもそうであり得るか」

それからもう一つ大事なことは、

「誰でもがそうであり得るか」

という、この二つなんです。特定のチャンピオンだけがそうなくても、我々には

「ああ、あなたは素晴らしいお方なんです。サヨナラ！」

と(笑)、それでお終いですよ。

「私と何の関わりあらんや」

です。やはり、その獲得された境地が、みんながその境地のおこぼれにあずかつて、みんなもそこにあずかれるというのが素晴らしいわけです。

「誰か特定の人だけが素晴らしいものを味わうというのは、こんなものはちつとも

素晴らしいくない」

と私は言うんです、ひがみかもしらんけど。だから、騙だまされたらいけません。「宇宙へそのうちに行けるようになりますよ」なんて言っているけれども、そんなことはごく少数の人が、あるいは行くかも知れない。そこへ基地でも造るかも知れない。けれども、そんな所へ誰



でもが行けるものですか、この貧乏な社会で経済的に不況不況と言っている状況の中で、そんなものは特定の人が行くだけであって、普通人がそんなに声かけて行けるようなものではないと思っています。

ところが、福音というものは誰でもが無条件でホイホイと本当に、

「気がついてみたらその境地にありました」

と。むしろこの娑婆において一番俗世間、俗界において聖なるものが俗界に降ってきて、そこを天国にしてくださいという、これが本当の福音なんです。これが小池先生が説いていらっしゃる福音です。こつちから無理をして、翼を張って天の彼方に、やつとこき誰かチャンピオンが到達するという、そういうものではないわけです。向こうから主さまが来てくださって——主さまというチャンピオンとあえて言いますなら——その方がご自分を全部砕いて、砕かれて飛び散ったキリストの生命が一人ひとりの中に無限に宿る。ちょうど、

「五千人の人たちが五つのパンと二匹の魚で——男ばかりで五千人、男女子供を入れれば一万人の人たちが——食べ飽きて、なお残り^{かど}が十二の籠に満ち溢れた」

という。あのように一人のお方の中に宿った本当の永遠の生命が、これが誰にでも無条件に、それを望む方であるならば、無条件に与えられる。

「いや、先生、無条件と言うけど、条件があるじゃないですか」

「うん、何ですか?」

「はい、砕けということですよ」

その人の魂が砕かれてある。傲慢な魂はダメだと。砕け、神さまの前の平伏しです。そして、その平伏し、砕けそのものも人間は、実は完璧にはできない。その砕けそのものもキリストが十字架で砕けて、

「この完璧な砕けをあなたに上げよう」

と言う。その事実に基づかって本当に完了して、

「はいー」

と言って平伏した時に、もうその瞬間にその無限無量の生命の世界があなたのものになっているという、これが福音の有難さです。

ですから、この第三図。神・キリストの上の豊かな生命の世界が、十字架を媒介にして下の我々、地球に住める者たちの中に宿ってください。同質、同次元のものとして宿ってください。しかも、無条件というこの無条件は、この十字架が無条件を与えてくれている。

「あなたの背きも、言い逆らいも、傲慢も全部この十字架で砕いているよ。十字架で砕かれない傲慢なんてないんだ。十字架で砕かれない不信仰なんてない。あなたはこのことですから無者にされている。絶対大丈夫だよ。」

と。無者にされたそのあとから追いかけてくるのは、キリストの生命です。十字架できれ



いに掃除された所へ間髪を入れず、同時的にくだつて来てくださるのがキリストの御霊の生命です。それが死んだ我を活かしてください。旧き我は十字架で死んだ。そうしたら、新しい我は、御霊がそこへ突入してきて、死んだ我を別の新生命に甦らせてくださる。

キリストは三日間、墓の中にいらつしやつて、三日目の――延べ三日ですけれども、実質は一日ちよつとです、まる一日は墓の中です――三日目の早朝に復活の姿で現われて来られた。そのようにあれば具体的にキリストの肉体の死、人間として生きてくださったキリストの具体的な死、それがある。そして、具体的な復活、これは間一日置いて現われた。

その姿が我々の中におきましては瞬時にして起こるんですね。歴史的にはそういう事実として行われた事柄が、我々においては瞬時にして、この主さまの十字架に打たれた瞬間にもう死生の転換が起こっている。それをなすとげてくださるのが御霊なんです。十字架という事実、これをキーとして、鍵としてそこに同時に御霊が私たちを甦らせる。そして、御霊は甦らせた私たちにくつついてくださる、御霊の生命というのは。これは本当に神秘なんです、これこそ神秘です。

果して、この第二図の神さまと融合した無我なる自分というものがそこまでの次元に到達しているのか。これは聞いてみないとわかりません。己が脱落しているかもしれません。己は脱落しているけれども、御霊のキリストの生命にハッキリと甦らされているものなのであるかどうか、これはわからないですね。私はそういう世界に入ったことがないから、何とも言えないけれども。座禅して瞑想して、

「ああ、私は宇宙と一つとなつた。旧きは過ぎ去つた！」

と言って、新しく生まれたビーナスの誕生みたいな、ああいう新しい我というものが十字架抜きで、十字架が与え聖霊が与えてくださる生命と本当に同じものなのか、別なのか、それは全然わからないですよ、誰も実験してくれないからね。けれども、ケチはつけません。そういう境地にお入りになる方に対しては、

「はい、ご苦労さまです、ご立派なことであらうしやます」

と。でも、私たちはそういう道ではなくて、三番目の道です。本当に十字架という確かなものによる。しかも、第二図のこの直接性のもものは不確かなんですよ。瞬間瞬間にそういうものが訪れるかもしれないけれども、その次の瞬間にはまたどん底かも知れません。キリストはドカーンとくださつたんですもの。

「もうあなたは絶対に大丈夫！」

という。この木の十字架は朽ち果てても、霊界に立っている見えない十字架は朽ち果てませんから。これがいつもあなたの中に宿っているんです。あなたの中に、一人ひとりの中に宿っていますから、そこに立ち返りさえすれば、

「あなたは大丈夫。十字架に気づいた瞬間にあなたは新しい生命にある。旧きあなたはなくなっているんだ、新しいあなたがそこに生まれている。御霊の私が保証



するよ」

と、十字架と聖霊でもって保証をくださるんです。十字架だけだったら、過去の事実でしょうね。十字架を瞑想して、十字架と一つになって、

「旧い我から解き放たれました。しかし、そこから先の私はどうなるんでしょうか?」

と、まだわからないけれども。それが瞬間的には、その復活されたキリストと同じ生命をそこで瞬間的に賜っている。それが具体的な形をとって現われるのは将来のことです。いわゆる体の贖われること、新天地の到来です。その時に、私たちのその今見えない本当の生命というものは形をとって現われる。今はキリストの中に隠されている。

「あなた方は既に死にたる者にして、新しき生命はキリスト・イエスの中に隠されてある。キリストの来たり給う時、あなた方は栄光の姿となって現われる」

と、コロサイ書、ピリピ書でハッキリと約束してくれています。パウロはそれが、ちょっとあの人は欲張りですからね、

「今、この生身のままであのキリストの復活の姿に達したい」

と頑張っているんですよ。ピリピ書に、

「後のものを忘れ、目当てに向かつて進みつつ、私はひたむきに進む。それはキリストの死の様に等しくば、復活の様にも等しかるべし。それを今、生身の自分が味わいたい」

「10キリストとその復活の力とを知り、又その死に効いて彼の苦難にあずかり、11如何にもして死人の中より甦ることを得んが為なり。12われ既に取れり、既に全うせられたりと言うにあらず、唯これを捉えんとて追い求む。キリストは之を得させんとて我を捉えたまえり。13兄弟よ、われは既に捉えたりと思わず、唯この一事を務む、即ち後のものを忘れ、前のものに向いて励み、14標準を指して進み、神のキリスト・イエスに由りて上に召したもう召にかかわる褒美を得んとて之を追い求む。」(ピリピ3・10～14)

と、パウロさんは言っている。

「我既に取れりとは思わない。前に向かつてひたむきに進んでいる」

という、あの旺んなる心意気。その点、小池先生の方は遠慮深いですよ(笑)。

「もう内に賜った聖霊が何ものとも代えがたい。その聖霊によって私の新しい生命は守られているから、それがやがて爆発する。今この生身の人間で爆発しなくても結構だ。しかし、聖霊によって生まれた私、そして私にくっついてくださっている聖霊、これが私の原動力だから、詩だつて何だつて書いてやる。全世界をアツと驚かすような詩を書いてみせるぞ」

というのは先生の心意気ではありますが、それは「聖霊が書かしめる」ということであつて、



もし「俺が書くぞ」というなら、それはダメですよ。そうではなくて、

「もう人間小池は死んでいる。旧き人間小池は死んだ。新しい小池が聖霊によって生み出された。この聖霊によって生み出された小池、これは芥子種一粒だつて凄いなんだ、凄い原始力なんだ。爆発力を持っている。これが詩を書くんだ。聖霊によつて書かされる詩だから、これは永遠不滅だよ。」

と。人間的なレベルから見たら、いろいろ欠点だらけかもしれない。表現がヘタクソであるとか何とか言われるかもしれない。けれども、質は凄いなんだと。

聖書の質がそうなんです。聖書のいろんな誤りもあるでしょう。事実が食い違っていたりするでしょう。そういう、人間的な目から見たら不完全でありながら、あるいはボロボロでありながら、

「質、生命は、聖書は凄いなんだ」

と、御言は叫んでいる、呻いている。その御言の呻き、響きを受けとれという。だから、「神の根源語」と言われた。

「神の根源語と相和さないと、本当の御言の響きというものは聞こえないよ」

と。だから、

「聖書は目で読む本ではない、耳で聴く本だ」

ということをお池先生は言われた。これはリアリティ（実在、現実）の次元なんです。思われたる世界ではない。リアリティなんです。そのリアリティなるものがなにごん霊の次元でありまして、私たちの肉の次元ではないものですから、どうしたつて表現が不充分的なんです。その天の事態をこの我々の地上の言葉で説明しなければならぬということ、ものすごく大変なんです。だから、そういう大変なことはやめて、もう合一してしまつて、もう神秘の世界で「ウワァ、ウワァ、アア……」と、何も言わない（笑）。これがいうならばお坊さんたちの姿。そして、「ワッ！」と喝かつを入れたら、そこに立っている人がぶつ倒れるようなね、そういうもう言葉の世界を超えたようなもの。それを先生は「気合」「気」「霊」と仰つたりするんでしょうけれども。

やっぱり、我々人間は言葉がほしい。神さまも言葉でもつて語つてくださったんですね、聖書のように。だから、その言葉がある。我々は化物ばけものではありません。やっぱり理性をいただいています、頭脳というものをいただいています。そして、ハートもいただいています、霊をいただいています。だから、この霊とハートと理性、そしてこの身体からだ、それが全体的にも全く調和をとっているのが本当の人間であつて、化物ではない。この理性、頭脳というところにちゃんと神さまは言葉をわからせようと語つてくださっている。それが、理性だけでわかるうとしないで、霊、心、ハート、情、そしてこの知性、理性、そういうもの全体でもつてそれを受けとつていくというのが本当の受けとり方だろうと思う。時間がかかりましようけれども。それでないと、直観つひだけじゃか掴つかめないものだったら、言葉をく



ださるはずがない。

先ず、キリスト教の特色は言葉の宗教だということです。

「はじめ太初に言ありき」

と訳されますように、単なる言葉ではなくて、それは霊言であるという。霊、その言は神であるという。それは霊であり神である。しかも、言葉として我々に語りかけてくる。我々はそれを、理性を通してながら一番深い霊の次元で受けとっていく。それを助けてくださるのが聖霊というたすけぬし助手、御霊の働きなんです。そういうふうな関係にあると思う。

●キリスト道

次の「キリスト道」という所で、

「日本人は道の民なんだから、キリスト教なんて言わないで、キリスト道と申した
い」
という。

《キリスト道》

さて普通はキリスト教といっているが、イエスはキリスト教とはいわず、「福音」「よろこびのおとずれ」といった。そして自分のことを

「私は道だ、真理だ、生命だ」

といった。それで私はキリスト道と申している。……

「まこと」というのは「本もの」ということです。そういうものは、からだで受けとっていくべきものであって、「すべし、すべからず」といったものではない。

道とは身につける真理で、観念的に理解する真理ではない。極めて具体的、人格的、しかも根源的に霊的である。

「極めて具体的、人格的、しかも根源的に霊的である」という。「具体的」というのは面白いですね、「からだ体を具そなえる」と書きます。体に関わります。「人格的」というのは、その人の道徳的、道徳的な面が人格でしょ。そして、「根源的に霊的である」と。そういったものが本当の道だという。だから、道を究めた人というのはそういうものをちゃんと体得して、常時ぐめう具有している人ということになります。

…… 釈迦は仏法という法を身に体したから、法身となっていた。キリストは神意の体現者であった。キリストや釈迦は本当に自然であり、自由であった。どちらにしても自我にとらわれない無私の境地に生きていたから、天国体であり、極楽体であった。

小池先生の話をずうつと聞いておられる方にとっては、もう当然と思っておられるけれども、先生はここにキリストと釈迦を、ある意味では対等に並べて、

「釈迦は仏法を身に体したから法身ほっしんとなった。キリストは神意の体現者であった。だから、キリストも釈迦も本当に自然であり自由であった。無私の境地に生きて



いた。天国体なるキリストと、極楽体なる釈迦ということ。」

このようにして二つを同列にして並べておられる。これは普通のクリスチャンは怒るんですよ。先生はそうじゃない。本ものは本ものと、ちゃんとすべてを包摂ほうせつしておられる。しかも先生の他の文章なんか見たらわかるように、

「キリストはお釈迦よりもケタ違いに凄い」

ということをおっしゃるんです。ここは一般の先生方を前にした講演だから、なるべくお釈迦さんを同列に置いておられるけれども、先生の本当の本音は、それはもうキリスト・イエスキリストの方がだんちに凄いということが本音なんです。でもとにかく、お釈迦さんの世界もすごいと言う。

「もし二大宗教というならば、キリスト教と仏教のこの二つだろう」

ということをお仰るわけですね。

私はあの「イスラム」というのはよく知りませんが、あの「マホメット」「ムハンマド・イブン・アブドゥッラーフ(570頃〜632)、アラブの宗教的、社会的、政治的指導者、イスラム教の預言者」というのも旧約聖書から出てると思いますと、マホメットはユダヤ教とは並ぶかもしれないが、キリストと並ぶものではないと思う。やつぱりあれは本当に変身してくれないと、ああいう排他的なレベルだったら、これはとてもやりきれないですよ、あの中に留まっていたら。同じことはユダヤについても言えます。ユダヤ教がそこに留まっていたらしょうがない。そこを突き抜けて、キリストという太陽の次元に突き抜けたらキリストなるお方。お釈迦さんもそこへ突き抜けたら、本当に一つなんです。

とにかく、突き抜けないとダメです。それを一番、小池先生が言いたいことでしょ。しかもその突き抜けが、我々凡人が、キリストという無限無量者をいただくことによつて、もう誰でもあるがままで、あるがままの場所で、そこでその突き抜けの境地をいただける。無条件にいただける。自分からは絶対に出てこないものを神さまは無条件にくださる。これが恵みというものだという。

太陽はあの彼方にあつて今日も照らしています。私たちが暖めています。太陽の方から我々に熱を送ってくれている。太陽の方から我々に近づいてきてくれているので、我々が太陽の方へ飛んでいくのでは絶対ありません。

そういうことで、神の恵み、キリストが「父よ!」と呼ばれたその霊なる神さま。この「神さま」というのも、これは暗号なんです。アッラー」と呼ぼうと、「神」と呼ぼうと、何と呼ぼうと、これは本当は言葉で表現できない。何かお方なんです。そのお方が我々の中に宿ろう宿ろうとして、宿れない私たちに御子みこキリストというお方をプレゼントしてください。イスラエルにお生まれになったけれども、あれは実は全人類に賜った贈り物なんです。ちょうど太陽が全人類に賜ったプレゼントであるように、キリストという霊界の太陽は、あらゆる宗教の区別を乗り越えて、それらの囚われを取っ払って、生命そのも



のをくくださった。それを無条件で受けてほしい。そういう世界、ここに我々が導かれていくということ。だから、

「すべし、すべからず」の道德境をつきぬけた「せざるを得ず」とつち側から湧き出る自由にして必然の境地であるから「よろこびのおとずれ」なのである。》

●受肉のキリストとキリストの受肉

その次の360頁の「受肉のキリストとキリストの受肉」、ここは非常に大事な所です。むしろ、我々の人間存在にとって最も大事な所といえます。この「宗教と文化」という主題からいえば、もう少し後の方に宗教と文化の関係のことが出てきますが、我々の生きざまという面からいいますと、この「受肉のキリストとキリストの受肉」のこの所が最も重要な所です。

《受肉のキリストとキリストの受肉》

イエスという人物は、ロゴス——これを普通は「言」と訳しているが、私はむしろ「霊言」または「言霊」と訳したい——たるキリストが、すなわち霊的実在が、イエスという人物に受肉したのだとヨハネ福音書に啓示されてある(ヨハネ1・14)。それゆえ、イエスはそれ自体不可知、不可測の神を眞現、体現した人物である。であるから、「私を見た者は父〔なる神〕を見た者である」(ヨハネ14・9)

といったので、これは彼自ら「父」と呼んでいる霊的実在者たる神と一如一体の結合を体験していなければ発し得ない言である。だからヨハネは更にキリストのことを、

「父のふところにいますひとり子」(ヨハネ1・18)

といている。このような神秘の根源相がイエスの信仰の根源の消息であったことを見のがしてはならない。

イエスはどんなお方であるかというところ、こういうお方であると。

それゆえに、我々の信仰もこのキリストをわがうちに宿す態のもの、究極的には「私を見た者は——私の破れ器にも拘らず——キリストを見た者である」と言い得る質的なものである。それはパウロの

「われ生く、されどもはやわれに非ず、キリストわがうちにありて生くるなり」

(ガラテヤ2・20)

の消息である。これは信仰をもってするキリストの受肉と申して可い。しかしこれは、キリストと同じ霊、すなわち聖霊が内住しないではいえないことである。聖霊の内住のためには、十字架の贖罪を本当に賜^{はらわ}の底で受け入れ、自分が本当に贖われ、我執という罪から解放されている者であるという絶対恩寵を無条件に受けとめなければダメである。手放しではどうにもならない我を贖いとした十字架のキリストの愛の前に絶対降伏しなければ、本当のたましいの砕けは得られない。砕けそのものはキリストの十字架であるから。神の審判の義であると同時に、キリストの贖罪の愛である十字架



において我は碎けを賜り、罪からの自由を賜った。そこに聖霊が宿る。み霊がくると、そこにキリストの義が与えられる。それは愛への力ある自由である。まことに義・愛不離一体の消息で、これが本当の信仰の現実である。》

この今、読み上げました361頁の所に先生の言いたいことが凝縮されています。一番中心です。始めの方の360頁の「受肉のキリスト」、それから「キリストの受肉」。この「受肉のキリスト」というのは、クリスマスに始まりまして、キリストが地上をずうつと歩いてくださった、あの姿です。

「キリストの実存十転」というのが一番初めの所に出てきます。「第一部 キリストの実存十転」に詳しく書かれていますように、霊界におられた神と共にあった霊なるキリストが、マリヤの中に宿りイエスとなって現われてくださったという、イエスという人において霊なる根源的なキリストがお宿りになった。そして、その霊なる霊的次元のキリストと、この肉なるイエスという方がピタリ一つであったという、この神秘ですね、これは本当に神秘です。人なるイエスの中に、霊なるキリストが宿っておられるんですから。この霊なるキリストが「父よ！」と呼ばしめている。

「私はもとあなたの所におりました。それが聖旨みむねによって地にくだつて参りました。そして、御言みことばを与え、あなたの御業みわざを躓つまずしました。今、御許みもとに参ります」

というあのヨハネ伝17章の最後の祈りがありますね、大祭司の祈りが。あそこに表われています。ヨハネ伝第一章は受肉の事態を宣言しているわけです。

「太初はじめに霊言霊言が宿る」

というところから始まって、

「この霊言は神であった、神と共にあった。それが宿った」

と。そして、17章で

「あなたの御許に帰ります」

ということを祈っておられる。こういうイエスという人なるイエスの中に、霊なるキリストが宿っておられる。それがイエス・キリストという一つの人格を形造っていた。

「どの部分が霊なるキリストで、どの部分が肉なるイエスか？」

そんなことは分離できない。全く神秘というほかないんです。

私は、あのクリスマスの事態は本当に理性ではわからないんですよ、正直言いまして。あの時は、

「マリヤさんの中の卵子に聖霊という精子に代わるものが宿って一人の人間になったのか。いや待てよ、体外受精みたいに別なところで出来上がったものがマリヤさんの中へ入ってきたのかな？」

と思ったりして(笑)、わからないんです。でも、全く別なものなら、あんな人間イエスとなつて歩かれるはずがありませんでしょ。人間の生殖という営みと全く別のものであれば、



これは我々と関わりがないはずですよ。それが正にヨセフと許嫁いいなすけの関係になって、そして知らないところで身ごもって、生長していくんですから。ヨセフが関わってないことはわかるんですけども、マリヤさんとその聖霊という種と——それから我々が人間的に言えば精子と言っているもう一方の卵子とくつつく精子——その精子はどうなっているのか、それは本当にわからないんです。でも、普通の人間だったら体外受精をしましても、精子と卵子とが結合して、それがあとでお腹の中に入れられるわけですから、そこで育っていく。この頃、他人の精子と卵子がひつついたやつを、ある女性の中に入れて、「仮腹かりばら」とかいうのがあるでしょ。そうなると、その精子と卵子というものは、いわゆるお腹を痛めているお母さんとは関わりがない存在です。ただ栄養分とかいろんなものはお母さんのお腹の中からその新しい生命の中へ吸収されて育っていくでしょうけれども、元々の本当の種というものは、精子と卵子というものは他人のものですね。

さあ、イエス・キリストというお方はどういう、まずは受精卵で、そしてどういうふう
に聖霊がそこに宿ってこられたのか、それは私にはわかりません。聖書はただマリヤに、
「あなたは聖霊によって身ごもる」

とだけ書かれています。

「だから、あなたから生まれてくる者は聖なる者である。それをイエスと名付けなさい」

と言われていますけれども、

「あなたの胎に宿るものは聖なるものである。聖霊によって身ごもる」

という、「聖霊によって身ごもる」とはどういう事態であるのか。霊なるキリストがおりて来られるということまでは、私はよくわかるんです。霊なるキリストが降りてきて、仮腹みたいにマリヤさんの卵子とも関係ない、マリヤさんのお腹の中に、もう出来上がっている聖霊による一つの受精卵みたいなものがただ宿ったのか。それとも、別の受精卵に聖霊がそこへくつついてお生まれになったのか。そのプロセスは私には全くわからない。今のような科学が発達してその頃、遺伝子や何かを調べてくれたら、よくわかっただろうと思うけれども、いや本当のところね(笑)。全く父なき子ということは私には考えられませんし。単なる母と聖霊という、精子に代わる聖霊とマリヤさんの卵子が宿った。これでもまだいいですよ、私にとつては。でも、そういうことは全然解明されませんからね。

「そんなことをクドクド考えることが不信仰だ」

と、昔は言われてしまった。でも私はそんなふうに決めつけてはいかんと思う。わからないものはわからないんですから。でも、「わからないから信じない」と言っているのではなくて、まぎれもなく「聖霊によって身ごもられた」ということは厳然たる事実なんです。その「聖霊によって身ごもられた」という事態がいつたいたいどういう事態を指しているのかということ、それを教えてほしいと言っているだけなんですよ、私は。そういうことな



ので、躓かないでくださいね。

我々が新しく誕生することだつて、これは実に神秘ですよ。

「人新たに生まれずば……」

と言うでしょ。

「では、どうやって生まれるのですか？ もう一回、お母さんのお腹の中に入らるんですか？」

と、大まじめでニコデモは聞いたわけですよ。それに対して、

「人は上から生まれなければ、霊から生まれなければ」

とキリストは答えられた。

「霊から生まれなければならぬ」

という。「霊から生まれる」とはということですか。小池先生は、

「私たちの旧き我は十字架で死んだ。我は主と共に十字架せられたりと、キリストと共に十字架せられて、旧き我は死んだ。」

と。それで、新しき我が生きていますね。旧き我は死んだ。死生の転換。

「この新しき我というのは、いったいどうやって生まれるのですか？」

ということですよ。十字架で旧き我を殺してください、これはよくわかりました。これは信仰によって受けとりなさいと。この「信仰的事実」とか、「信仰的現実」と仰る「信仰的」というのは、

「信仰をもつて受けとるべき霊的事実だ」

ということなんです。その事実がウソだと言っているのではない。その事実は、いわゆる目に見える事実とか、肉の次元でわかる事実ではなくて、信仰をもつて受けとる。この「信仰をもつて受けとる事実」というのは、

「神さまが無条件にくださった、神さまがなしてください、その事実である」

ということなんです。それが、幻であるとか、思われたる世界ではなくて、リアリティだよという、これは間違いないです。十字架で私たちはこの旧き我から解き放たれた。これは無条件に私たちに「旧き我の死」というものをくださった。

私たちが自殺したところで、旧き我は死につこありません。自殺しても霊は生きています。もしもありません。その霊は旧き我のまま生きています。そして、自殺したら、自殺したからといって、なにも旧き我は死にません。我々の霊が本当に十字架で殺されなければならぬんです。十字架で我々の旧き我が殺され、死する。そして、新しき霊、新しき我となる。この旧き霊が、我なる霊が、これが革新される、新しくされる。これが十字架で死に、甦って生きる。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」

と。そして、新しい我に甦って生きる。さつき申しましたね、イエスさまは、旧きイエス



さまは十字架で本当に死なれた。そして丸一日、墓の中におられて、そして三日目に甦よみがえられた。聖書は、

「神の大能の御手がキリストを甦よみがえらせた」

と言っている。小池先生は、

「キリストの中に宿っている聖霊が突破してキリストを甦よみがえらせた。聖霊の力だ」

と仰る。つまり、イエスというお方の中に宿っているこの聖霊なる生命、これは初めから宿っておられました。ところがその後、もつと激しく聖霊のバプテスマを受けられましたね、あのヨルダン川で。それまでも聖霊が宿っておられたけれども、あのヨルダン川で天が開けて聖霊が鳩のごとく降ってきて、そして聖霊が体に充滿して、宿っている霊なるキリストのところへ聖霊が更に充滿して、いわばキリスト・イエスなるお方は聖霊漬けになってしまった。それからあの荒野の試みに合われます。

聖霊漬けになったキリストは絶えず父と交わりをなさいます。だから、もう本当に一如なんです。もう本当に海の上を歩いていくような、そういう次元のキリストでありますから。私はあれは、肉体のキリストがああいう次元に変貌されて、海の上を歩いて行かれたって、ちつとも不思議でないと思ってているんです。市川君なんかは、

「あれは復活されたキリストが海の上を歩いて行かれた」

と、全部、「復活されたキリストの姿だ」というふうに言う。それはそうかもしれない。けれども私は、やっぱりあれは聖書に書かれている通り、五千人を五つのパンで養い、

「あなたたちは先に舟で向こう岸へ行きなさい」

と命じられて、自分は祈っておられて、そして靈化した姿のキリストが海の上を歩いて行かれても、何も不思議はない。キリストは肉体の姿で現われつつ靈化し、また肉体に戻り、また靈化する。そういうことを繰り返さったお方ではないかなと、そのくらいに私は思っています。あの山の上の変貌だってそうでしょう、眩まぼゆい姿に変わられたというのも。肉体は肉体のままで眩まぼゆくなっておられるのかもしれないよ。それは肉体が霊体に変化する時に胃や腸がどうなるのか、そんなことはわかりませんが、とにかく、そのくらいにキリスト・イエスという方は靈化されていらっつやった方。あるいは霊なる力がもの凄くキリストの肉体の中に働いて、もう物理法則を超えてしまうような、そういう次元で歩まれたお方。それでも結構です。とにかく、そういうお方ですよ。

そこで、

「我々はどうなるのか?」

ということなんです。我々は自分で死ぬわけにはいきません。死ねません。自殺したって、どうにもなりません。だから、この十字架が私たちに本当の「旧き我の死」をくださった。そして、キリストの復活が私たちに新しき誕生、旧き我からの新しい誕生をくださった。それをなしてあげてくださっているのが聖霊なんです。



「十字架・聖霊は一如一体ですよ」と小池先生は仰います。

「十字架と聖霊は切り離してはいけない。十字架即聖霊。十字架というもので私たちは無をいただいた。そのあとを追いかけるようにして、即、聖霊という神さまの霊が降って宿って、それが旧き我を新しくしてくれる。この聖霊が私たちの霊とくつついていくさる。」

と。ちょうど、イエスさまに霊なるキリストがくつついたように、私たちに旧き我々の霊を新しい霊に甦らせ、そして、新しき我となって、そしてそれをなしてくださったのが、十字架のあとから追いかけてこられた聖霊。これも、「追いかけてこられた」と言ってますけれども、これは瞬間的なんです、同時的なんです。同時多発なんですよ(笑)。十字架の死と聖霊の生命は同時多発なんです。そうとしか説明できない実力を持っています。

さっきの先生の文章をもう一度読みましょう。361頁。

『われ生く、されどもはやわれに非ず、キリストわがうちにありて生くるなり』(ガラテヤ2・20) の消息である。これは信仰をもつてするキリストの受肉

キリストを受肉すること。キリストが肉体の我々の中に宿ってくださること。キリストを受けいれること。

と申して可い。しかしこれは、キリストと同じ霊、すなわち聖霊が内住しないではないえないことである。聖霊の内住のためには、十字架の贖罪を本当に^{はらわた}腸の底で受け入れ、自分が本当に贖われ、我執という罪から解放されている者であるという

この恵み。この「自分が本当に贖われ、我執という罪から解放されている」ということが旧き我の死なんですね、別の言葉でいうと。「もはや我にあらず」という。

「自分が本当に贖われ、我執という罪から解放されている者である、その恵みを無条件に受けとる。これが必要だ」という。

絶対恩寵を無条件に受けとめなければダメである。手放しではどうにもならない我を贖いとした十字架のキリストの愛の前に絶対降伏しなければ、

私が「絶対無条件降伏」と言いましたのは、「無条件」というのは、こちらの方から条件をつけない。「絶対」というのは、向こうの方から絶対貫いてこられるという絶対です。

本当のたましいの碎けは得られない。碎けそのものはキリストの十字架

これが碎けそのものだ。このキリストの十字架が碎けそのものを下し賜っているのであると。十字架というものは「神の審判」を現わす。

であるから。神の審判の義であると同時に、キリストの贖罪の愛である十字架において我は碎けを賜り、罪からの自由を賜った。そこに聖霊が宿る。み霊がくると、そこにキリストの義が与えられる。それは愛への力ある自由である。まことに義・愛ある



いは義と生命。義・愛が不離一体の消息で、これが本当の信仰の現実である。》

●第3巻 『無の神学』

小池辰雄著作集第3巻の『無の神学』を来年やりますので、もう読み始めていただきましたけれども、そこで、今の所に関わりのある箇所をちょっと申し上げておきます。初めの方、「第一部 無の神学原論」の「第五章 キリスト者とは何か」という文章がある。副題に「キリストの無者」とある。その一番初めが「(一) a 人間の破れ——原罪・無明」と書いてます。失われたる人間の姿です。それから、「b 十字架の破れ——絶対恩恵の無私」が出てきます。そして、「c 聖霊の突入——絶対恩恵の無量」とあります。このa、b、cの三つに分けておられる。だから、人間存在というのは、まずは「破れ」だと。それからbが「十字架の破れ」。この破れた我々の中に「絶対の恵みとして無私無我をやるよ」というのが「十字架の破れ」だという。そこをちょっと読みます。39頁。

《『無の神学』

「第一部 無の神学原論」第五章 キリスト者とは何か」

「(一) b 「十字架の破れ——絶対恩恵の無私」

……我々の「破け」そのものは全存在的恒常的とは言えない。それを全存在的、決定的にした人がある。それは「破れ」でも居らず、従って「破け」るを要しない人であった。ところが彼は我々の「破れ」を身に負い、我々に代って「破け」を全身に受けて砕かれた人である。ナザレのイエスである。イザヤ書第53章の預言を成就した人である。即ち彼の十字架がそれである。キリストの十字架の贖罪によって、我々の「破れ」は天衣無縫にされた。破れたまま、その奥の相は我執という根本的な罪から解放されて、天衣無縫の靈衣が衣せられている。我々はあてにならない自分の破けも棄て、何ものもこれを砕くことのできない「破け」を賜ったのである。イザヤ書第53章5節の「彼は我らの罪のために砕かれた」とはこのことである。キリストの十字架の破けによって、我らは無罪者とされた。絶対無条件のゆるしであり、めぐみである。相対的な、生れながらの我らは相変わらず罪びとにすぎない。しかし、贖われたる我らは罪無き、無罪者、私心なき無私者、即ち贖われたる無者で、これが信仰の根源現実である。》

この「贖われたる我ら、罪無き、私心なき無私者」、これが「新しき我」ですね。これが新しく生まれた我です。

そして、cの所に「聖霊の突入——絶対恩恵の無量」とあります。ペンテコステのことが出てきます。41頁。

《私は阿蘇の山奥で手島郁郎氏と共に特別の祈りの集会をもった。そのとき正に、ペンテコステと同質の事態が起きた。天界のキリストから直接聖霊のバプテスマにあずかった。……聖霊のバプテスマを全身に受けたのであった。この確然たる体験のあとで、



聖書のヴェールがとれた。聖書の次元は正に聖霊の次元であることがハッキリした。……贖罪の十字架を全存在を以て体受する棄身の祈りに聖霊の降る事実を発見した。パウロと共に、

「われキリストと共に十字架されたり、我生く、されど我にあらず、キリスト
わが内に生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

この句が自分の告白となった。「キリストわが内に生く」とはキリストの聖霊のことであることが確然とした。天界のキリストはみたまのキリストとしてわがうちに生き給うのである。パウロはそれを端的に「キリストわがうちに」といったままである。…十字架の贖罪を体受し、これを土台とした祈りに聖霊が臨むことは確かである。こちらが十字架で砕けの現実、無私の現実、となったたましいこそ聖霊は臨み給う。あの啓示の歴史的順序は厳然たるものである。

十字架があつて、復活があつて、それからペンテコステがある。この順序だと。

キリストの十字架のあがないによって砕かれ、無者とされ、全身的な祈り入りの現実で、聖霊が上から突破、突入して来て、聖霊のいのちに生きる者とされる。この順序と構造は極めて重要である。》

ですから、私はこう思うんですね。本当に十字架で砕けは完了している。この砕けが完了しているという、天の次元における事態。天の次元で——今はその木の十字架は朽ち果ててありませんけれども——その見えない十字架は永遠に立っています。その十字架で、それはもう時間を超え、所を超え、永遠に我々の中に入ってくる。気がつけば、私はもう主と共に十字架せられてあるという、これは根源現実なんです。これは事実です、リアリティなんです。そのことに気づくということ。それが普通の人間は気づけない。だから、祈りの中で気づかしてもらおう。一遍気づいた人間は、もう当たり前のようにそれを思ってしまうけれども、そうでない人は、なかなかそれが、

「あなたのものですよ、あなたの中にその十字架が今立っている。あなたはもう解き放たれてしまっている。あなたは無罪放免なんです、生命なんですよ」

ということを受けとれない。だから、先生はここで、
「からだで受ける、平伏して受ける」

と言われる。体で受ける。そして、根源的にそこで私たちの霊は新しくされてしまったんですね、その十字架で。そうしてくださったのは聖霊の力なんです。十字架と聖霊の力がそうしてくださった。そこへ、追い打ちをかけるように、聖霊が更に臨んでくる。この追い打ちをかけるように聖霊が臨んで来てくれなければ、本当に力ある信仰生活というのができない。根源現実で私たちは旧き我から解き放たれ、そこで旧き我は死んで、新しい我がキリストの復活と一緒に新しい私が生み出された。それはもう、神さまの所では起こってしまった、私の中でも起こってしまった。



しかし、それだけではまだ「オギャ〜」と生まれただけで、バイタリテイ(vitality) 活力、生命力、生活力)をもつて生きていく力とはなれない。そのバイタリテイを持って力強く生きていく原動力となってくれるのが、それ以後限りなく降^{くだ}つてきてくださる聖霊なんです。それは限りなく毎日毎日降つて来ていただかないとダメなんです。「オギャ〜」と生まれただけでは、お乳を飲まないといけません。そのお乳は聖霊なんです。聖霊はこの十字架で新しくされた我々の所には遠慮なく降つてくださる。

私たちが「ノー、ノー」と言つて抵抗すればダメですよ。私たちは、ポツカリと大きな口を開けて——七つの鳥の子が母鳥から餌をもらうように——ポツカリと口を開けて、天に向かつて待っている。それが祈りなんです。

「祈りとは、主さまの中に躍り入ることだ、祈り入ることだ。自分をキリストの懐へ投げ込むことだ」

と、いろんな表現で小池先生が仰るのは、新しく生まれた我が

「主さまー」

と言つて、いつも先ずは主の懐へ飛び込んでいく。そういう我々の姿に対して、キリストの側からは遠慮なく聖霊を上から注いでくださる。それが時あつてか、全身が痺れたりした時は、

「ああ、これが聖霊のバプテスマだ！」

というふうに言うんだけど、そういう現象面は二次的なものであつて、根源的には新しく生まれた我々が日々乳を吸うように、空気を吸うように、霊気、キリストの霊、聖霊を絶えずいただく。これは絶えず平伏しておれば、上から降ってくるんだと。これは法則なんだと。水は低きに流れ去る……(以下録音なし)……。

